研　究　紀　要

第 12 号

1 9 9 5

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

序

方形周溝墓と溝
—方形周溝墓に伴う溝について—
福田　　聖 …… 1

古墳時代集落祭祀の一考察
平岩　俊哉 …… 17

埼玉県内出土象嵌遺物の研究
—埼玉県の象嵌装太刀—
瀧瀬　芳之・野中　　仁 …… 37

北武蔵の古墳時代馬飼養地域
山川　守男 …… 95

中世地鎮の一様相
—大里郡寄居町末野遺跡例を中心として—
鈴木　孝之 ……113

北武蔵の古墳時代馬飼養地域

山川　守男

要旨　北武蔵地域において、古墳時代馬に関する考古資料、すなわち馬歯骨・馬具・馬形製品等の分布状況を総括すると、大里郡域の櫛挽台地と児玉郡域の本庄台地の周辺部に集中するため、この2地域が古墳時代馬の飼養地域であった可能性を指摘できる。この妥当性を検証するために、律令期の御牧である上野国利刈牧、同国有馬島牧、信濃国塩野牧の比定地をとりあげて対比材料とした。これらの比定地は地名や地形によって牧の範囲が推定されているだけでなく、考古学的調査によって牧の施設の一部や関連集落が明らかになっており、古墳時代からの継続性も考えられている。対比の結果、対象となる地域の生産性の低さや関連集落との位置などに共通性を見出すことができ、大里・児玉両郡域での古墳時代馬飼養の一端を明らかにすることができる。

はじめに

古墳時代5世紀末以降、多くの古墳で副葬品に馬具が見られるようになり、わが国に乗馬の風習が広がっていたことは周知のこととなっている。一方、それらの馬がどこでどのような形態で飼養されていたかについては考古学的に解明されていないのが実状といえる。そんな中で、日本書紀に見える河内の馬飼の本拠地とされる大阪府四条畷市周辺の5世紀後半から6世紀にかけての遺跡から馬歯骨が多数出土すること（野島1984）や、近年になって群馬県子持村の白井遺跡群で6世紀第II四半期に榛名山二ツ岳より降下した軽石層（FP）下から多数の馬蹄圧痕が検出されて、馬の放牧の一端が明らかにされたこと（群馬県埋文1991～1994、麻生1993）などは古墳時代の馬飼養の実態を垣間見ることのできる数少ない例といえる。それ以外の馬飼養の実態に言及するものの大部分は、律令期の『延喜式』に登載された「牧」に関係するものであり、実際、馬飼養にかかわる遺構・遺物の存在する遺跡は牧比定地に隣接するものが多いと言える。

本稿では考古資料をもとに北武蔵地域での古墳時代の馬の飼養地域を推定していくが、対象とする古墳や遺跡周辺には牧比定地は存在せず、律令期の牧に比べて馬の放牧範囲や管理形態など不明瞭な点が多いと言わざるをえない。表題では「牧」を用いないで「飼養地域」としたが、本文中では牧比定地がなく考古資料にもとづいて漠然とした範囲で馬の飼養を考える場合に「飼養地域」とし、律令期の牧や具体的な遺構を伴う場合の「牧」と区別するものとする。

1　牧と考古資料―研究の現状―

律令期の牧は、官衙や寺の所在地の比定と同様にながらく地名をもとにして所在地が推定されて

来たといえる。近年になって大規模開発に伴う発掘調査によって資料が集積され、従来の牧比定地と考古資料が結び付くことによって馬飼養の実態が少しずつ明らかにされつつある。

牧の比定地と関連づけられる考古資料は大きく2種類に分けられるが、そのひとつは馬の存在を最も端的に示す馬歯骨や馬蹄圧痕、牧施設の一部としての溝・柵・築堤・建物遺構などである。信濃国埴原牧と繋飼場跡（松本市）との関係は早くから注目された例だが（一志1945）、同じく信濃国の塩野牧に関連すると見られる鋳師屋遺跡群が調査され（堤1988•1989）、多数の馬骨が出土している。上野国では利刈牧比定地域の白井遺跡群で先に述べたようにFP下から多数の馬蹄圧痕が検出され、馬の放牧が古墳時代後期まで遡ることが明らかにされたり、有馬島牧の一部と見られる半田中原•南原遺跡で放牧地を区画すると考えられる溝が検出されている（大塚1994）。最近、武蔵国でも三吉野遺跡群（日の出町）で半田中原・南原遺跡と同様な溝が検出され、小川牧に関連すると見られている（松崎1995、東京都埋文1995）。塩野牧•利刈牧•有馬島牧に関しては後の項で改めて概観する。

もうひとつは古墳から出土する馬具や馬歯骨である。これらは、出土数が多く牧も多数存在した信濃国を中心に研究がすすみ、馬具は岡安光彦氏によって、また馬歯骨は桃崎祐輔氏によって集成と分析が行なわれている。前者では馬具副葬古墳の分布と牧との対応関係から東国舎人騎兵の構成にまで言及し（岡安1986）、後者では馬匹の使用形態の想定にまで及んでいる（桃崎1994）。

以上の牧の存在を前提とした二者に対して、既知の牧が存在しない地域で馬関連の考古資料から馬飼集団および飼養地域や牧の存在を想定する例も見られる。福岡県小郡市三沢古墳群のように馬埋葬土壙の集中から馬飼集団の存在を想定したもの（宮田1990•1993）、同じく馬埋葬土壙の集中から馬の集積拠点を想定した長野県飯田市の新井原•高岡古墳群や茶柄山古墳群の例（小林1994）、半田中原・南原遺跡や三吉野遺跡群と同様に無遺構地帯を囲む溝の存在から牧を想定した群馬県安中市中原遺跡の例（大工原1991）などである。筆者もかつて北武蔵の妻沼低地に馬骨をはじめとする古墳時代馬関連の考古資料が集中することから、馬飼集団の存在する可能性を指摘したが（山川1992）、これもこの分類に入るものである。

2　古墳時代馬関連遺物と馬飼養地域の想定

(1)　古墳時代馬関連遺物

古墳時代馬に関連する遺物とは、馬の存在したことを示す馬歯骨や馬具、そして馬を意識した祭祀行為の所産としての馬形製品である。既稿では、このうちの馬歯骨と馬形製品、そして古墳以外から出土した馬具を集成してみたが(山川1992)、本項ではその後の新知見と古墳出土の馬具を加えて各遺物の様相をまとめ、馬飼養地域想定のための基礎データとしたい。

①馬歯骨

これまで調査・報告された夥しい数の遺跡のうち、古墳時代に限ってみると馬歯骨が出土している遺跡はきわめて少ない。本報告や概報以外に調査担当者からの情報等を合わせてもつぎの11遺跡ほどであるが、きわめて少数ながらも、出土状況より河川・溝、住居、古墳の3種類に分けてとらえることができる。

○河川・溝

・美里町南十条遺跡：和泉期後半の大溝下層から馬歯が出土（註１）

・熊谷市諏訪木遺跡：後期の河川跡から頭頂部を打ち欠かれた頭蓋骨が出土（文化庁1995）

・大宮市根切遺跡：鴨川河岸で、後期の土器に混じって７頭分以上の馬歯骨が散乱状態で出土（宮瀧1993）

河川や溝の中から出土したものはわずか３例だが、全国的に見て古墳時代から律令期に至るまで最も多くの例が報告されている出土形態といえる。その性格については、水神への犠牲と関連づける祭祀的な方向からの解釈（土井1983）と、遺体を解体・利用した後に投棄したとする方向からの解釈（松井1987）などがある。南十条遺跡の大溝から出土した馬歯は前者に属すると考えられるが、諏訪木遺跡と根切遺跡のものは後者となる可能性も考慮しなければならない。

○住居

・本庄市今井川越田遺跡：後期の住居跡の覆土中から馬歯が出土（註２）

・岡部町砂田前遺跡：６世紀中葉の住居跡１軒の覆土中から下顎骨が出土（岩瀬1991）

・深谷市上敷免遺跡：５世紀後半の住居跡１軒のカマドから馬歯が出土（瀧瀬・山本1993）

・深谷市城北遺跡：住居跡５軒の覆土中から馬歯骨が出土し、このうち４軒は６世紀中葉で散乱した状態（山川1995）

上敷免遺跡以外は覆土中への投棄である。最も早いものである上敷免遺跡では、小鍛冶炉やふいご羽口を伴う第31号住居跡のカマド内から歯が出土し、祭祀的なものと見られる。城北遺跡の６世紀中葉の４軒では歯骨が土器や礫とともに散乱した状態で出土し、遺体を利用した後に、廃絶して凹地となった住居跡に投棄したものと考えられる。砂田前遺跡第85号住居跡からは下顎骨が出土しているが、時期や廃絶住居跡への土器との投棄など城北遺跡に類似する。

○古墳

・神川町青柳古墳群：南塚原支群で古墳周溝内の土壙２基から馬歯が出土（註３）

・深谷市上増田古墳群：古墳周溝内から馬歯が出土（註４）

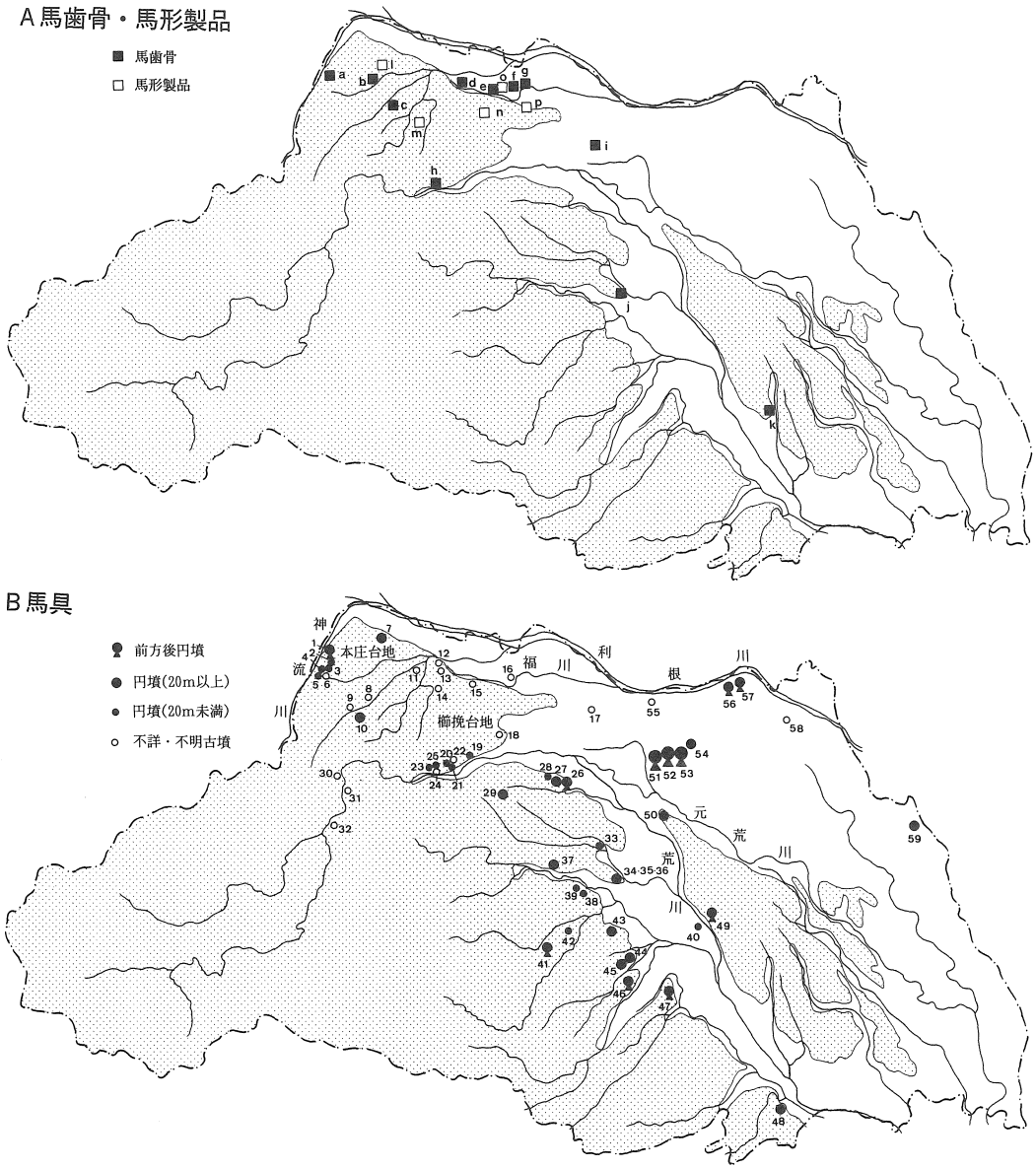
・花園町小前田古墳群：第87号墳の横穴石室内から馬骨、第88号墳の横穴石室内から馬歯が出土（中川他1958）

・東松山市古凍古墳群：根岸裏第４号墳と同第14号墳の間に存在する土壙３基から馬具が出土（埼玉県博1995）

河内・信濃・上毛野など古墳時代馬関連の資料が集中する地域では、古墳の周溝内や古墳間の土壙内から馬歯骨の出土する例が多数報告されている。北武蔵地域のものとして４例をあげたが、上述した河川・溝や住居の例のように出土状況や伴出遺物が明確におさえられていないためここではまだ参考程度にとらえておきたい。小前田古墳群と上増田古墳群のものは詳細は不明である。古凍古墳群の３基の土壙内からは馬具が出土し、馬骨は遺存していないが、他地域の例から見て青柳古墳群のものとともに馬埋葬土壙と考えられる。全体的に散発的な存在で出土状況のデータも不足しているが、古墳の周溝内・石室内からの馬歯骨や、馬具・馬骨を伴う土壙などが検出されている信濃や上野毛地域の様相と比べてみると、北武蔵地域での存在は否定されるものではなく、後に述べるよう

に他の古墳時代馬関連遺物の分布域とも重なることから、敢えて古墳時代馬のものとしておきたい。

古凍古墳群のものも含めて馬歯骨の出土した11遺跡の分布について見ると、根切遺跡と古凍古墳群以外は熊谷以北の北武蔵北部に集中し、このうちの上敷免遺跡・城北遺跡・砂田前遺跡・上増田古墳群が櫛挽台地北側の妻沼低地西部に存在している。馬歯骨は馬の存在を示す１次資料と考えることができ、これが妻沼低地西部の遺跡に集中するということをこの地域に本来的に馬が集中していたことの証左としたい。



a 青柳古墳群　b 今井川越田遺跡　c 南十条遺跡　d 砂田前遺跡　e 上敷免遺跡　f 上増田古墳群　g 城北遺跡
h 小前田古墳群　i 諏訪木遺跡　j 古凍古墳群　k 根切遺跡　l 西富田新田遺跡　m 今泉祭祀遺跡　n 割山埴輪窯跡群
o 本郷前東遺跡　p 西別府祭祀遺跡　　（馬具出土古墳 番号は第１表に対応する）

第１図　北武蔵の古墳時代馬関連資料分布図

第１表　北武蔵の馬具出土古墳

No.	古墳名（市町村）	墳形（規模 m）	時期（須恵器型式）	馬　　具
1	中新里諏訪山古墳（神川）	前方後円（41）	—	（馬具）
2	神川町No.105古墳（神川）	円（16）	７Ｃ前半	辻金具
3	神川町No.144古墳（神川）	円（17.5）	７Ｃ前半	（馬具）
4	二ノ宮17号墳（神川）	円（15）	７Ｃ前半	（馬具）
5	城戸野２号墳（神川）	円（13）	６Ｃ後半～７Ｃ初（TK43～TK209）	鉸具・飾金具
6	旧青柳村（神川）	—	６Ｃ後半～（TK43～）	環状鏡板付鐙
7	御手長山古墳（本庄）	円（41）	６Ｃ後半～７Ｃ初（TK43～TK209）	鉸具・鞍金具・飾金具
8	生野山所在古墳（児玉）	—	—	壷鐙
9	長沖古墳群（児玉）	—	６Ｃ代	楕円形鏡板付轡・f 字形鏡板付轡・環状鏡板付轡・鉄地金銅張唐草文心葉形杏葉・鉄地金銅張雲珠・鉄地金銅張辻金具・鉄地金銅張帯先金具・兵庫鎖・鐙金具・飾金具（複合資料）
10	庚申塚古墳（児玉）	円（34）	６Ｃ後半～（TK43～）	雲珠・辻金具・貝製雲珠・板状辻金具・鞍金具
11	旧榛沢村（岡部）	—	６Ｃ前葉	馬鐸
12	四十坂所在古墳（岡部）	円（—）	—	鈴杏葉
13	当後所在古墳（岡部）	円（—）	—	五鈴杏葉・三鈴杏葉
14	茶臼塚・下稲荷塚（岡部）	—	—	（馬具）
15	萱場唐沢川所在古墳（深谷）	—	—	（馬具）
16	東川端遺跡（深谷）	—	６Ｃ前葉	馬鐸
17	東浦所在古墳（熊谷）	—	—	雲珠
18	三ケ尻所在古墳（熊谷）	—	—	（馬具）
19	見目1号墳（川本）	円（19）	６Ｃ末～（TK209～）	金銅製八角鈴
20	黒田1号墳（花園）	円（18）	６Ｃ後葉（TK43）	環状鏡板付轡・木芯鉄張三角錐形壷鐙
21	黒田4号墳（花園）	円（18.5）	5C 末～６Ｃ前半（MT15～TK10）	環状鏡板付轡・無脚雲珠・鉸具・飾金具
22	黒田古墳群（花園）	—	5C 末～６Ｃ前半（MT15～TK10）	環状鏡板付轡
23	小前田22号墳（寄居）	円（17）	６Ｃ後葉（TK43）	銅鈴
24	小前田57号墳（寄居）	—	—	（馬具）
25	小前田65号墳（花園）	円（—）	６Ｃ末～７Ｃ初（TK209）	環状鏡板付轡
26	伊勢山古墳（熊谷）	前方後円（41）	６Ｃ末～７Ｃ初（TK209）	環状鏡板付轡・鉸具・鞍金具
27	瀬戸山古墳（熊谷）	円（28）	—	杏葉・雲珠
28	万吉1号墳（熊谷）	円（18）	７Ｃ前半	鉸具
29	西原18号墳（江南）	円（22）	６Ｃ後葉～末	鉄地金銅張雲珠・鉄地金銅張辻金具・鉄地金銅張帯留金具・鞍金具
30	下御所在古墳（長瀞）	—	—	鏡板
31	旧井戸村（長瀞）	—	６Ｃ末～７Ｃ初（TK209）	環状鏡板付轡
32	柳瀬1号墳（皆野）	円（—）	—	（馬具）
33	岩鼻13号墳（東松山）	円（16）	—	（馬具）
34	根岸裏14号墳（東松山）	1号土壙	６Ｃ末	環状鏡板付轡・鉸具・鞍金具・鞍飾金具・帯金具
35	根岸裏14号墳（東松山）	2号土壙	６Ｃ末	環状鏡板付轡・鉸具・鞍金具・鞍座金具・足金具・壷鐙
36	根岸裏14号墳（東松山）	4号土壙	６Ｃ末	環状鏡板付轡・鉸具・鞍金具・鞍座金具・帯金具
37	冑塚古墳（東松山）	円（37）	６Ｃ後半～７Ｃ初（TK43～TK209）	環状鏡板付轡・斜格子文心葉形杏葉・雲珠・辻金具・鞍金具・飾金具
38	諏訪山1号墳（東松山）	円（19）	5C 後葉（TK47）	楕円形鏡板付轡・板状辻金具・鉸具・飾金具
39	諏訪山22号墳（東松山）	円（14.5）	—	（馬具）
40	広徳寺所在古墳（川島）	円（8）	—	鈴
41	瓢箪塚古墳（毛呂山）	前方後円（—）	—	鐙
42	山王塚古墳（坂戸）	円（12.5）	—	（馬具）
43	塚越2号墳（坂戸）	円（20）	—	（馬具状鉄製品）
44	どうまん塚古墳（川越）	円（24.5）	5C 後葉（TK47）	楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉・環状雲珠・板状辻金具・鉸具

No.	古墳名（市町村）	墳形（規模m）	時期（須恵器型式）	馬　　具
45	下小坂3号墳（川越）	円（30.5）	5C末～6C前半（MT15～TK10）	楕円形鏡板付轡・辻金具・鈸具
46	牛塚古墳（川越）	前方後円（47）	6C後半～7C初（TK43～TK209）	心葉形鏡板付轡・無脚雲珠・辻金具
47	父塚古墳（川越）	前方後円（—）	6C末～7C初（TK209）	環状鏡板付轡
48	一夜塚古墳（朝霞）	円（30）	5C末～6C中葉（MT15～MT85）	楕円形十字文鏡板付轡・楕円形鏡板付轡・三葉文心葉形杏葉・無脚雲珠・兵庫鎖・鈸具
49	ひさご塚古墳（桶川）	前方後円（41）	6C末～7C初（TK209）	環状鏡板付轡・鉄製輪鐙・飾金具
50	箕田3号墳（鴻巣）	円（34）	6C末	鈸具
51	稲荷山古墳（行田）	前方後円（120）	5C後葉（TK47）	f字形鏡板付轡・三環鈴・鞍金具・鈸具・木芯鉄板張杓子形壷鐙・環状雲珠・環状辻金具・板状辻金具・鈴杏葉
52	将軍山古墳（行田）	前方後円（90）	6C後半～7C初（TK43～TK209）	環状鏡板轡・十字文心葉形鏡板付轡・鉄製輪鐙・棘葉形杏葉・雲珠・辻金具・鈴・鞍金具・飾金具・蛇行状鉄器・馬冑
53	若王子古墳（行田）	前方後円（95）	6C後半～7C初（TK43～TK209）	雲珠・杏葉
54	鎧塚古墳（行田）	円（20）	—	（馬具）
55	大稲荷2号墳（行田）	円（—）	5C後葉（TK47）	楕円形鏡板付轡
56	御廟塚古墳（羽生）	前方後円（—）	—	轡
57	永明寺古墳（羽生）	前方後円（78）	6C後半（MT85～TK43）	環状鏡板付轡・木芯鉄板張三角錐形壷鐙・雲珠・鞍金具
58	宮西塚古墳（加須）	—	6C中葉（MT85）	鐘形鏡板付轡・辻金具・雲珠
59	目沼9号墳（杉戸）	円（26）	5C末～6C前半（MT15～TK10）	三鈴杏葉・環状雲珠

②馬　具

北武蔵地域の馬具については既に関義則・宮代栄一両氏によって詳細な集成と分析がなされ、42例が示されている（関・宮代1987）。本項ではその成果を基礎とし、その後新たに出土・報告された資料17例を加えて分布、古墳の墳形・規模、馬具の時期・特徴の相関関係についてまとめてみたい（註５）。

○分布

馬具が出土した古墳の分布を第１図Ｂに示したが、正確な出土位置が不明で地名のみが明らかな伝承等の資料も組み込んだ。現行の郡別に見ると大里郡（No.11～29）とそれについで児玉郡（No.１～10）に分布が集中していることが明瞭であり、出土地点数の上では大里郡が32％、児玉郡が17％を占める。武蔵国最大級の埼玉古墳群を擁する北埼玉郡（No.51～58）は逸品の数量は多いものの出土地点数では14％にすぎず、児玉郡と並んで北武蔵屈指の古墳密集地域である比企郡（No.33～40）でも14％である。古墳の密度では北武蔵で最も高いと見られる児玉郡をも凌いで大里郡域の荒川以北、櫛挽台地に集中する状況から、この地域が他地域にも増して馬利用に関わる集団と強く結びついていたと見ることができる。

○古墳の墳形・規模と馬具の時期・特徴

上記の分布傾向を念頭に置き、分布地域と馬具出土古墳の墳形・規模との関係、また分布地域と馬具の時期・特徴との関係を整理してみたい。関・宮代両氏の成果をもとに追加資料も合わせて馬具出土古墳の内容を第１表にまとめたが、須恵器型式への比定は両氏の論考に拠るものである。また円墳は直径20mを目安として、主墳的なものとそれ以外の小円墳とに分けらるため、以下の概説

に反映させることにする。

馬具を伴う小円墳は大里郡と児玉郡に集中し、荒川に面した黒田・小前田古墳群と神流川に面した青柳古墳群に多い傾向がある。また主墳的な古墳は、大里郡では伊勢山古墳、瀬戸山古墳、西原18号墳が、児玉郡では中新里諏訪山古墳、御手長山古墳、庚申塚古墳などがあるが大里郡の3古墳は荒川南岸の比企丘陵上に位置し、地域的には比企郡の古墳と同質に考えられる。大里・児玉両郡域ではこれらの主墳を除外しても小円墳の割合は高い。時期的には黒田4号墳がＭＴ15～ＴＫ10段階に位置付けられ大里・児玉郡域では相対的に古いものとなっているが、それ以外はＴＫ43段階以降のものであり、伝長沖古墳群の馬具群や庚申塚古墳の雲珠・辻金具に強い装飾性を見出だせるほかは、環状鏡板付轡を中心にした実用的馬具で黒田4号墳のものにしても同様である。

一方、その他の地域において明確に小円墳から馬具の出土している例は少なく、大部分が埼玉古墳群の稲荷山古墳や将軍山古墳を頂点とする各地域の主墳からの出土と言ってよい。諏訪山1号墳は19mの円墳であるが、県内でも最古期のＴＫ47段階の楕円形鏡板付轡や鈴釧を持ち、諏訪山古墳群中でも特殊で主墳的な存在と見ることができる。時期的にはTK47段階のものとしてどうまん塚古墳・諏訪山1号墳・稲荷山古墳・大稲荷2号墳が、MT15～MT85段階のものとして一夜塚古墳・下小坂3号墳・宮西塚古墳・目沼9号墳などがあり、ｆ字形鏡板付轡および楕円形鏡板付轡を中心として装飾性の強い杏葉や雲珠を伴う。さらに大里･児玉郡域の小円墳に馬具副葬が盛興するTK43段階以降も馬具が副葬されるのは依然として主墳であり、胄塚古墳・将軍山古墳・永明寺古墳などでは環状鏡板付轡に前代同様装飾性の強い杏葉や雲珠が伴い、将軍山古墳は朝鮮半島と関係の深い馬胄や蛇行状鉄器が伴うことで著名である。さらに、古凍古墳群内の馬埋葬土壙も直径約30mの主墳的な円墳である根岸裏第4号墳の周溝外側にあり、この古墳と結びつけて理解できる。

以上のように分布・墳形・時期・馬具の特徴ともに大里・児玉郡域とその他の地域では対照的な傾向が見られるため、簡略ながら次のようにまとめておきたい。

	大里・児玉	そ の 他
・分　　布：	集中的	散在的
・馬具出土古墳：	群集墳を形成する小円墳が主	前方後円墳・大型円墳が主
・馬具の時期：	TK43以降が大部分	TK47以降各段階にわたる
・馬具の特徴：	環状鏡板付轡中心に実用的	装飾性強く威儀具的

TK43以降、すなわち6世紀末から7世紀前半にかけては実用的馬具の副葬量が急激に増加する時期とされ、この傾向が顕著な信濃・駿河を中心とする地域には馬匹生産や騎馬兵力（東国舎人）の存在が想定されている(岡安1986)。大里･児玉郡域も馬具の時期と特徴でこれと同じ傾向を示し、数量や分布の規模では信濃や駿河にはるかに及ばないまでも北武蔵の中では相対的に分布が集中するため、この地域にも馬匹飼養集団の存在を考えることができる。

③馬形製品

土製および石製の馬形製品は数量的には少ない。土製のものは本庄市西富田新田遺跡(佐藤1993)、岡部町今泉祭祀遺跡（坂本1993ｂ）、深谷市割山埴輪窯跡群（今泉他1981）で、また石製のものは深谷市本郷前東遺跡（川口1989）と熊谷市西別府祭祀遺跡（埼玉県1984）でそれぞれ出土している。

土製のものが古く、馬形と鞍形がある西富田新田遺跡のもので5世紀中葉、今泉祭祀遺跡のもので5世紀後半から6世紀初頭、割山埴輪窯跡群のもので6世紀前半なのに対して、石製のものは2遺跡とも7世紀初頭で、位置も近接している。

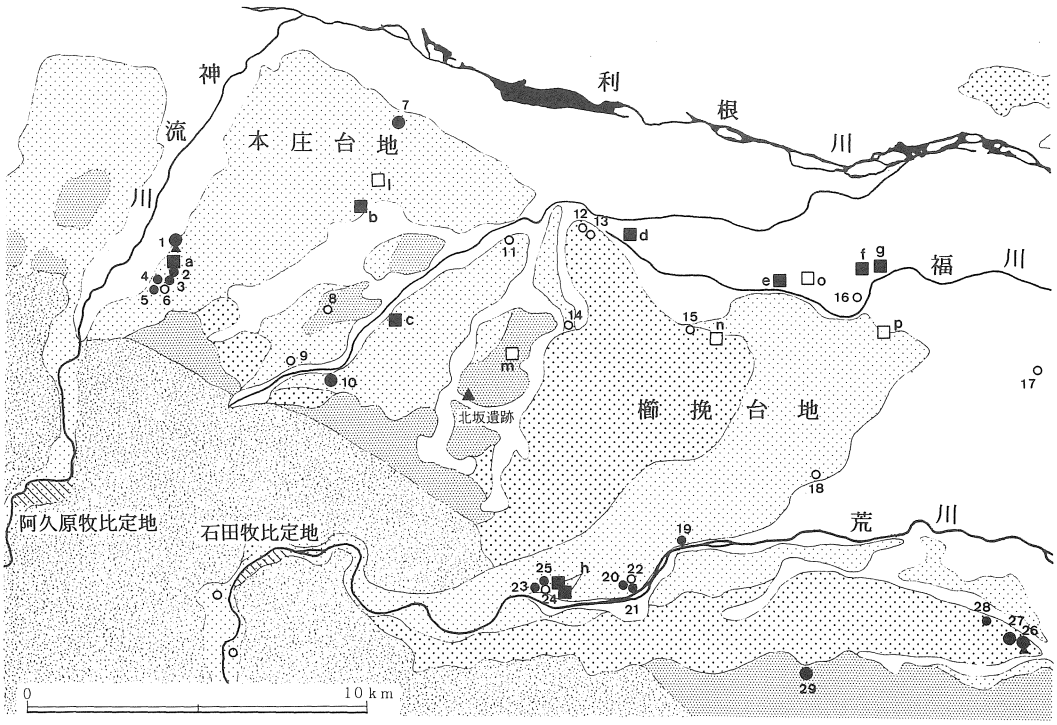
全国的に見ても出土例の少ない現状では、馬形製品を用いて祭祀を行なう集団が必ず馬飼集団であるという断定はできない。しかし、河内の馬飼の本拠地である大阪府四条畷市奈良井遺跡で5世紀後半から6世紀中ごろの馬形土製品が出土していることや(野島1984)、馬歯骨や馬具と同様に大里・児玉郡域に分布が集中することなどから馬飼養に関わる集団の祭祀に伴う製品と想定しておきたい。

⑵　馬飼養地域の想定

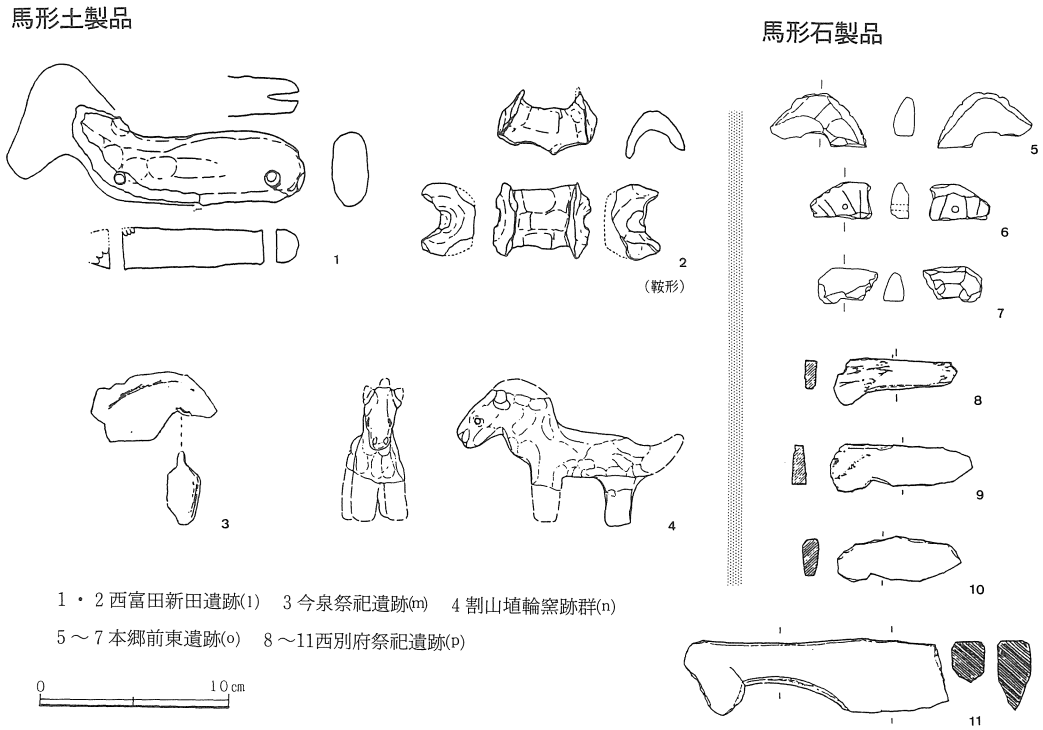
これまで見てきた馬歯骨・馬具・馬形製品は、北武蔵北部の大里・児玉郡域に分布の集中が重なることが確認された。この地域での3種類の古墳時代馬関連資料の分布を合わせたものが第2図である。これらの要素をもって大里郡域の櫛挽台地と児玉郡域の本庄台地に古墳時代馬の飼養地域を想定し、両地域の特徴をまとめてみたい。

大里郡域では、荒川によって形成された扇状地である櫛挽台地とその北側の妻沼低地西部に分布が集中する。この周辺の古墳時代後期の集落と古墳群との位置関係は、低地帯に集落跡が多数存在し、古墳群は台地縁辺部に密集する傾向がある。低地帯には馬歯骨が出土した砂田前・上敷免・城北の3遺跡のほか馬形石製品が出土した本郷前東遺跡も存在する。同じく馬形石製品が出土した西別府祭祀遺跡はこの低地帯の水田経営に関わる扇端部の湧水点の祭祀によるものである。古墳周溝内から馬歯の出土した上増田古墳群は城北遺跡などに近接しこれらの集落を基盤として形成されたと考えられる。低地帯に臨む台地北東縁部（扇端部）には実態が不明ながらもかつては多数の古墳が存在し、正確な地点不詳の馬具出土も数例伝えられているが、これらの古墳も低地帯の集落を形成基盤としていると見られる。一方、台地南縁部には馬具の副葬された小前田・黒田・見目の3古墳群が存在し、さらにこのグループに馬具の出土が伝えられている三ケ尻所在古墳や横穴石室内から馬歯骨の出土した小前田第87・88号墳が加わる。個々の出土は散発的にも見えるが、荒川に面する台地上に連続する分布は示唆的であり、馬の利用と関係の深い被葬者達の存在が考えられる。台地南縁部の古墳群に対応すると考えられる集落は、北東縁部と違って実態不明と言わざるをえない（大里郡市1992)。以上の部分を除いた櫛挽台地上中央部には古墳時代の遺跡が形成されない広大な空白地帯が存在していたと考えられる。

これと同じ傾向は児玉郡域においても見られる。この地域では、神流川によって形成された扇状地である本庄台地周辺に分布が集中する。台地南側は古墳時代前期から継続的に水田が経営されてきた女堀川を中心とする地域であり、大溝から馬歯が出土した南十条遺跡や馬形土製品が出土した西富田新田遺跡が5世紀中葉であるのをはじめ、6世紀後半にも今井川越田遺跡で馬歯が出土している。これに対して、台地反対側の北西縁部には実用的馬具が副葬された小円墳や馬埋葬土壙が存在する青柳古墳群が展開している。神流川に面するこの地域は厚い礫層のために水田開発が遅れ、集落や古墳群が顕在化するのは6世紀以降であり、南縁部とは対照的である。馬関連遺物の集中する台地両側縁辺部に挟まれる台地上中央部は生産性が低く、古墳時代の生活痕跡の空白地帯と考え



（記号・番号は第１図と同じ）



１・２西富田新田遺跡(l)　３今泉祭祀遺跡(m)　４割山埴輪窯跡群(n)

５～７本郷前東遺跡(o)　８～11西別府祭祀遺跡(p)

第２図　大里・児玉郡域の古墳時代馬関連資料

られる。

以上のように、北武蔵においては馬関連遺物の集中から、大里郡域の櫛挽台地周辺と児玉郡域の本庄台地周辺に馬飼養集団と施設（牧）の存在を想定したい。

3　御牧比定地域の実態

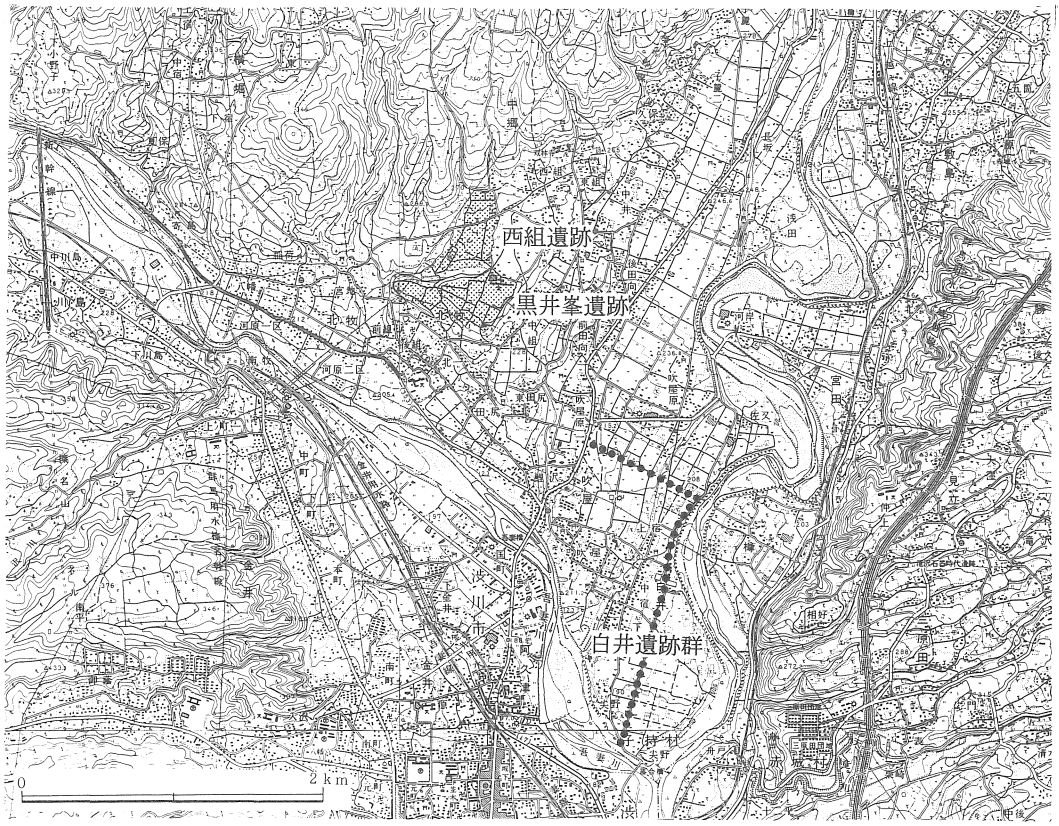
これまで馬関連の考古資料の分布から北武蔵の中でも範囲を絞り込んで馬飼養地域を想定してきた。そのひとつである大里郡域の櫛挽台地北東部では、飼養集団を低地帯の集落に、また放牧管理地を台地上に想定したが、これは牧と関連集落とを総合的に検討するとき妥当性をもつものであろうか。本項ではこの二者の関連を考えることのできる３地域を取り上げて参考にしてみたい。この３地域とは『延喜式』に見える上野国利刈牧・同国有馬島牧・信濃国塩野牧の各比定地域だが、これらの地域では牧施設の一部が確認されているのと同時に、関連する集落も調査され、牧・集落・立地条件の三者の関係をとらえることができる。

(1)　利刈牧―白井遺跡群と黒井峯・西組遺跡

利刈牧は群馬県子持村に比定されてきたが、近年この地域の白井遺跡群で６世紀第２四半期の榛名山二ツ岳の爆発に起因する軽石層（FP）直下の畠跡から多数の馬蹄圧痕が検出され、利刈牧の前身となる放牧地として注目されている。地形的には子持山南麓の利根川と吾妻川に挟まれた狭長な河岸段丘上に展開している。国道建設に先立つ調査などによって南北１km、東西0.8kmにわたる範囲で馬蹄圧痕が検出されている（群馬県埋文1991～1994、麻生1993）。一方、同じくFP直下の著名な集落跡である黒井峯・西組の２遺跡では、畠を伴う集落内に家畜小屋と推定される平地式建物が検出され、土壌の残存脂肪分析の結果、黒井峯遺跡では馬が、また西組遺跡では牛が飼われていたことが判明している（石井・梅沢1994）。

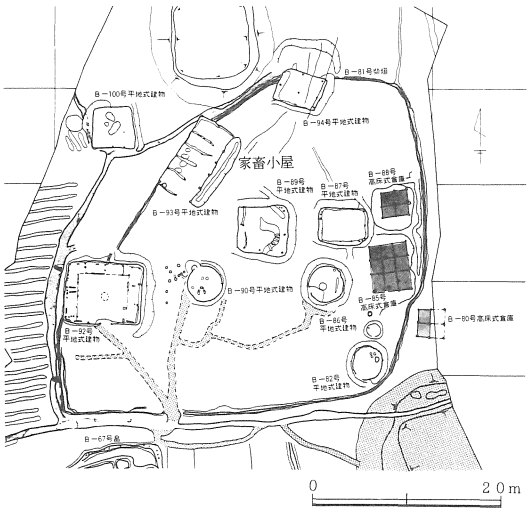
さて、これらの遺跡は子持山麓・利根川・吾妻川によって囲まれた一辺４～５kmの三角形の段丘上にあるが、白井遺跡群は利根川寄りの低位段丘面上に偏るのに対して、黒井峯・西組両遺跡は山麓側の高位段丘面に存在する。白井遺跡群で集落が確認されていない反面、黒井峯・西組両遺跡では畠が存在するにもかかわらず、馬蹄圧痕が検出されていないことから馬の放牧地域は区別されていたと考えられる。放牧地域と集落との距離は１km程だが、高位置の集落側から見れば放牧地域は段丘崖線を背後にして低位置に広がるかたちとなる。

厚い軽石層に覆われた遺跡の実態は不明な点が多いと思われるが、現状では限定された地形の中で放牧地域と集落とが分離しながらも同時に存在していることが明らかであり、黒井峯遺跡や西組遺跡の集落が馬飼養に関わった可能性は非常に高い。古墳時代の集落内から牛馬存在の痕跡が検出されることはきわめて稀だが、両遺跡の家畜小屋の存在はこの性格の上で理解することができよう。FPの降下後には厚い軽石層によって農業生産性は低下したと見られるが、白井遺跡群を乗せる段丘面は集落域として再開発され、遺跡群中の白井二位屋遺跡では７世紀後半から10世紀後半にわたる９軒の住居跡から牛馬骨が出土しており（黒田1994）、利刈牧の経営に関与していたと考えられる。

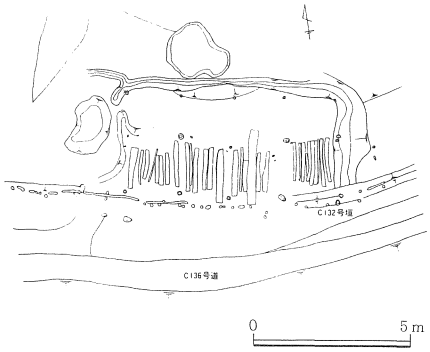


●●●●●● は群馬県埋文の調査範囲

西組遺跡



黒井峯遺跡Ｃ―76号平地式建物



第３図　牧比定地と関連資料(1)［利刈牧］

⑵　有馬島牧ー半田中原・南原遺跡と大久保Ａ遺跡

有馬島牧は群馬県渋川市有馬に比定されているが、同市半田中原・南原遺跡はその南方２㎞に所在し（大塚1994）、大久保Ａ遺跡はさらに1.5㎞南方の吉岡村にある（上原他1986）。どちらも榛名山東麓の緩斜面に位置し、考古資料をもとに牧との関連を想定した考察がなされている。

半田中原・南原遺跡は南側を吉岡川、北側を滝沢川に区切られた東西に長い幅１㎞の扇状地上にある。この中軸上にあたる位置で約65,000㎡の無遺構地帯をコ字状に囲む幅1.6m、深さ0.8mの溝が検出されたが、区画地帯は調査区外に広がって100,000㎡前後におよぶと予想されている。区画の外側には７世紀代の群集墳と、８世紀前半から10世紀後半にわたって営まれた 162軒からなる集落跡が広がっているが、報告者はこれを牧とその関連集落であると想定している。区画溝はごく一部で住居跡と重複するものの、古墳や住居を避けながら整然と掘削され、弘仁９年（818年）の大規模地震による地割れの影響を受けていないことから、それ以降の平安時代のものと見られている。溝掘削以前に既に存在していた古墳や住居跡が区画内におよんでいない状況は、溝の有無に関係なく古墳時代からこの区画内に構造物を設けられない制約があったことの反映と見ることができる。

この遺跡における牧に関する報告者の見解を要約すると次のようになる。水田経営・畑作ともに不適な地に８世紀に突如出現したこの集落は牧の経営を目的に計画的に置かれたものであり、住居内から出土した馬歯や馬具（鉸具等）はこの集落の住人が牧での作業に従事したことの一端を示し、大型竪穴住居群や掘立柱建物群は牧長の生活兼職務地であると考えられる。そして「有馬」の地名との位置関係から、北縁を午王川、南縁を吉岡川、東縁を利根川によって囲まれた三角形の自然地形を放牧地とし、溝による区画内は家畜を追い込む施設と考えられるということである。

以上のように半田中原・南原遺跡では、牧に関連する施設と集落とが近接していることが明らかになり、古墳群との位置関係から無遺構地帯の設置は古墳時代に遡る可能性も指摘できる。

大久保Ａ遺跡も半田中原・南原遺跡と同様の扇状地上に立地する。開析谷を形成する駒寄川両岸にまたがる集落で、７世紀前半から11世紀にわたる262軒の住居跡が検出された。馬骨を伴う住居跡は２軒しかないが、報告者によると、有馬氏の伝統をくむ豪族集団が榛名山二ツ岳の爆烈による大打撃の後に水田耕作に適さない地に移住して伝統的な牧経営を続けた集落であり、大鎌や鎌・馬具・銅鈴などが多数出土し、周辺の遺跡とはそのあり方を異にするとされている。半田中原・南原遺跡には距離的に近く時期的にも重なるため、そこで想定された放牧地との関係も考えられるが、河川（谷）側に集落が展開し扇状地の中軸寄りに牧施設が設けられていたことを考慮すると、大久保Ａ遺跡でも集落に隣接して扇状地上に牧施設が存在した可能性が大きい。

⑶　塩野牧ー鋳師屋遺跡群

塩野牧は浅間山南麓の長野県御代田町塩野付近に比定されている。牧の入口と考えられる「馬瀬口」付近を南端とし、「馬飼の土堤」と呼ばれ牧関連遺構と見られている一辺50mの方形の土堤状構築物を含む牧推定範囲は南北３㎞以上にもおよぶ（堤1988・1989）。

鋳師屋遺跡群は馬瀬口の南方約2.5㎞の千曲川北岸の段丘上に立地し、御代田町から佐久市にわたって広がる集落跡で、５世紀後半に集落形成が開始された後、奈良・平安時代に飛躍的に集落が拡大する。遺跡群のうち十二遺跡では住居跡内から馬歯が出土し、野火付遺跡では埋葬馬が検出さ

第4図　牧比定地と関連資料(2)［有馬島牧］

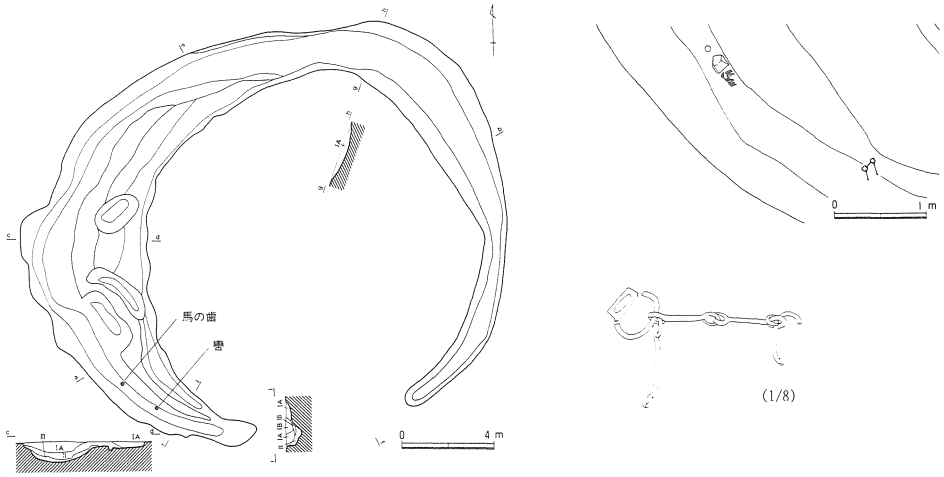
○馬飼の土堤

塚田古墳群○

鋳師屋遺跡群

0　2km

塚田K－4号古墳



第5図　牧比定地と関連資料(3)［塩野牧］

れているが、東山道の推定ルートの長倉駅推定地に隣接することから塩野牧か長倉駅の経営にあたった人々の集落と考えられている。なお塩野牧推定範囲内にも奈良・平安時代の集落は存在しており、これらの集落も牧経営に携わっていたと考えられる。さらに、この推定範囲内には古墳群も存在するが、このうちの塚田K－4号古墳（円墳・径14m・7世紀前半）の周溝内から馬の下顎歯と環状鏡板付轡が出土しており(小山1994)、塩野牧の前身をこの時期まで遡らせて考えることもできる。

以上、御牧比定3地域の実態を概観してきたが、次のような傾向を見出だすことができる。

・水田経営に適さない生産性の低い台地上に展開する。

・複数の集落が牧経営に関わる。黒井峯・西組遺跡の状況から見て、古墳時代には農耕集落の性格も合わせもつが、律令期には生産性の低い台地上に現われた半田中原・南原遺跡や大久保A遺跡のように牧経営が主体になっていたと考えられる。

・古墳時代に牧の前身を求めることができる。ただし、有馬島牧や塩野牧については古墳の存在からのみで、集落の実態は不明である。

これらの傾向をもとに、想定した北武蔵の古墳時代馬飼養地域の実態を次項において検討してみたい。

4　古墳時代馬飼養地域の検討

大里郡域で馬飼養地域として想定した櫛挽台地は荒川が形成した扇状地で、寄居町市街地付近を扇頂部として北東方向に広がり、南辺16km、北西辺12km、扇端幅11kmの広さをもつ。前項で概観した3か所の御牧比定地域が地名や地形などから3～4km四方の範囲に想定されていることから考えると、櫛挽台地全面を放牧地とするのは困難である。馬関連の遺物の集中から見て、古墳時代後期段階には台地の南縁と北東縁に放牧地が設けられ、奥行は御牧比定地と同様に3～4km程だったのではないか。この範囲では台地に沿う集落がその生活に資するため木材を伐採し、その後に形成されるススキやササを主体とする植生域が放牧地とされていた可能性が強い。

次に牧と集落との位置関係であるが、櫛挽台地北東縁部と妻沼低地内の馬歯骨出土集落との距離は、最も離れる城北遺跡が2.5kmであるのに対して、上敷免遺跡が0.5km、砂田前遺跡が0.3kmの近距離となっており、後二者は台地直下の集落と見て無理はない。御牧比定地域の集落のあり方から見ると、基本的に牧経営の主体となる集落は牧の隣接地に存在することが物理的に必然性を持つが、地域集団としてこれに携わるとすれば放牧地へ移動可能な範囲内の集落もその対象となりうる。また、牧の飼養形態は、基本的に夏から秋にかけては農作物への被害を防ぐために柵・堀・土塁等の区画内に放飼する限定放牧で、冬から春にかけては山野・河原等で自由に放飼する自由放牧であったと考えられているが(山口1994)、自由放牧の時期には牧周辺の多くの集落も牧馬と関わりをもったはずである。塩野牧から約2.5km離れた鋳師屋遺跡群は城北遺跡と同様に、放牧域からやや離れた集落であるが、前者は東山道の推定ルート上、後者も妻沼低地の流通の主幹であった福川の沿岸というどちらも交通の要衝にあって、馬飼養だけでなく交通や物流にも携わる複合的な性格をもっていたのではないだろうか。さらに城北遺跡では、斃死馬の脳髄を利用した鹿革なめしが行なわれて

いた可能性も考えられ(山川1995)、馬飼養地域の中では馬の管理だけでなく馬の利用や死体処理にいたるまで多様な機能を持つ集落が存在した可能性を指摘しておきたい。

櫛挽台地では、このほか馬具副葬古墳が集中する台地南縁部に対して、古墳時代後期に扇頂部周辺に集落が多数出現するが、先に述べたように現在のところ両者の対応関係や集落の実態は不明である。一方、台地北西縁部では古墳時代の馬飼養の痕跡はごくわずかしか認められないが、岡部町北坂遺跡（９世紀）からは「中」の字の焼印や銅鈴が出土しており、平安時代には牛馬の放牧が行なわれ、この遺跡で管理していたと考えられている（増田・中島他1981、坂本1994)。

本庄台地は、櫛挽台地に比べて扇端幅が半分の約６kmの狭い扇状地で馬具副葬古墳が北西縁部に集中し、馬歯や馬形土製品の出土集落は南縁部に存在する。ここでも古墳と集落との関係は不明だが、両者に挟まれた部分の台地幅は3.5kmほどなので、櫛挽台地に比べて台地上のかなりの部分が放牧地となりえたと考えられる。

前項の終わりにまとめた御牧比定地域の傾向と対応させると、大里・児玉郡域の古墳時代馬飼養地域は生産性の低い台地上に展開し、農業経営の側面を合わせ持つ複数の集落が馬飼養に関わった可能性があるという点で条件的には合致するといえる。しかし反面、やや適合困難な部分があることも否定できない。まず、御牧比定３地域が河川や崖線等の地形的特徴によってかなり明瞭に放牧範囲や管理対象範囲が限定できるのに対して、大里・児玉両郡域は遺物の分布によって想定される漠然とした範囲であるため、実際に比較すると広い範囲とならざるをえなかった。また、直接牧の管理施設となるような溝・柵・築堤等の遺構が未検出であり、さらに大里郡域の低地部以外では馬飼養関連集落と想定しうる遺跡の実態が不明確と言わざるをえない。

今回対象とした大里・児玉両郡域の台地上には古墳時代馬飼養の痕跡は顕著だが、律令期までの継続は不明瞭であり、御牧比定３地域とは対照的といえる。しかし本稿ではここまで全く言及に至らなかったが、大里・児玉両郡域の西方には秩父山地が連なり、ここには律令期の牧である秩父牧が存在した。貢馬の記事から延喜３年（903年）には存在していたことが明らかなこの牧には、『政治要略』の承平３年（933年）の勅旨牧転入の記事によって石田牧と阿久原牧が含まれていたことも知られている。このうち石田牧は大里郡域櫛挽台地の小前田古墳群より荒川を10km遡上した長瀞町岩田の河岸段丘上に、また阿久原牧は児玉郡域本庄台地の青柳古墳群より神流川を６km遡った神泉村阿久原に比定されている。どちらも山地と河川の崖線に囲まれた地形で生産性が低いという点で上野国の例に類似し、石田牧比定には近隣に馬具出土古墳が存在するが、阿久原牧比定地には古墳時代の集落や古墳は存在しないようである。この２牧成立の背景に櫛挽・本庄両台地上の古墳時代馬関連資料の実態を考え合わせると興味深く、例示した３か所の御牧比定地と違って古墳時代から律令期へと場所を移動させた牧の変遷パターンのひとつととらえることもできよう。

おわりに

本稿には「御牧比定地域ではないが、馬関連資料の集中する地域に馬飼養を想定してみる」という前提がある。このため、より具体的な牧比定地の実態と照合させると前項のような不適合や不明確な点が生じるのは避けられないところである。しかし、大里・児玉郡域は馬具だけでなく馬歯骨

や馬形製品の出土が集中する特殊な地域であり、明解な解答が得られないまでも古墳時代から律令期にかけての馬飼養を考察するうえで注目に値する地域であると言える。本稿ではこの重要性を明確にできたことと、遺物の集中をもとにして地形や集落との関係を検討できたことに意義があったと考えている。今後は馬飼養の確実な上毛野や信濃での馬関連資料の分布と御牧比定地および関連集落との関係を整理した上で、大里・児玉郡域と同様な状況で馬飼養が想定される他地域の分析を重ねて行く必要があろう。

本稿を草するにあたり、次の方々から御指導、御教示を頂きましたが、その内容を十分に生かせなかったことを反省しつつ、ここに記して感謝の意を表したいと思います。(敬称略)

青木克尚、礒崎　一、江原昌俊、大谷　徹、大塚昌彦、小川泰樹、金子彰男、木村李花子、古池晋禄、坂本和俊、篠崎　潔、瀧瀬芳之、田口一郎、堤　隆、西中川　駿、宮崎重雄、宮田浩之、桃崎祐輔、山本　靖

本稿は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の平成４年度研究助成の成果である。(1996年2月)

註

(1) 1977年に調査された(埼玉県教委1982)。報文はないが、調査参加者の坂本和俊氏が近隣の樋之口遺跡と合わせて紹介している（坂本1993ａ)。

(2) 1993年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査した。調査担当者の礒崎一氏から御教示をいただいた。

(3) 神川町教育委員会の金子彰男氏から御教示をいただいた。

(4) 深谷市教育委員会の古池晋禄氏から御教示をいただいた。馬歯と古墳との関係は不明とのことだが、信濃や上毛野に存在する類例との対比から、筆者の判断により古墳に伴うものとして扱う。

(5) 関・宮代両氏の取り上げた42例については該当論文（関・宮代1987）を参照してもらうことで出典文献を省略し、追加17例の文献をここに示す。神川町№105古墳（埼玉県教委1989)、神川町№144古墳（埼玉県教委1991)、二ノ宮17号墳(埼玉県教委1995)、東川端遺跡(瀧瀬1990)、小前田22号墳(瀧瀬1986)、小前田57号墳(埼玉県教委1994)、万吉１号墳（駒宮他1991)、柳瀬１号墳（埼玉県教委1993)、西原18号墳（江南町1995)、岩鼻13号墳（埼玉県教委1994)、古凍14号墳１・２・４号土壙（埼玉県博1995)、諏訪山22号墳（埼玉県教委1994)、塚越２号墳（埼玉県教委1991)、箕田３号墳（鴻巣市1989)、鎧塚古墳（埼玉県教委1994)

引用・参考文献

麻生敏隆　1993 『白井大宮遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集

石井克己　1990 「黒井峯遺跡の集落構造研究(1)」『群馬考古学手帳』Vol.1　群馬土器観会

石井克己・梅沢重昭　1994 『黒井峯遺跡―日本のポンペイ』日本の古代遺跡を掘る４　読売新聞社

一志茂樹　1945 「官牧考」『信濃』第２巻第４号・第５号　信濃郷土研究会

今泉泰之他　1981 『割山遺跡』深谷市割山遺跡調査会

岩瀬　譲　1991 『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集

上原啓己他　1986 『大久保Ａ遺跡』吉岡村教育委員会他

大里郡市文化財担当者会　1992 「大里地域の遺跡Ｉ」『埼玉考古』第29号　埼玉考古学会

大塚昌彦　1994 『半田中原・南原遺跡』群馬県企業局・渋川市教育委員会

岡安光彦　1986 「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』第71巻第４号　日本考古学会

川口　潤　1989 『本郷前東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集

黒田　晃　1994 『白井遺跡群―集落編Ｉ―(白井二位屋遺跡)』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第160集

群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991～1994　『年報』10～13
江南町　　1995 『江南町史』資料編１考古
鴻巣市　　1989 『鴻巣市史』資料編１考古
小林正春　1994 「長野の古墳―下伊那の古墳時代の馬埋葬」『馬の埋葬』日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨
駒宮史朗他　1991 『万吉下原遺跡』埼玉県教育委員会
小山岳夫　1994 『塚田遺跡』御代田町教育委員会
埼玉県　　1984 「西別府祭祀遺跡」『新編埼玉県史』資料編３
埼玉県教育委員会　1989 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和62年度
　　1991 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成元年度
　　1993 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成３年度
　　1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
　　1995 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成５年度
埼玉県立博物館　1995 『最新出土品展』展示解説
坂本和俊　1993ａ 「樋之口遺跡」『古墳時代の祭祀』第２回東日本埋蔵文化財研究会
　　1993ｂ 「今泉祭祀遺跡」『古墳時代の祭祀』第２回東日本埋蔵文化財研究会
　　1994 「北坂遺跡」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第３回東日本埋蔵文化財研究会
佐藤好司　1993 「西富田新田遺跡」『古墳時代の祭祀』第２回東日本埋蔵文化財研究会
関　義則・宮代栄一　1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14
高崎市観音塚考古資料館　1994 『馬具　古墳時代に馬がいた』
大工原豊　1991 『中野谷地区遺跡群発掘調査概報２』安中市教育委員会
瀧瀬芳之　1986 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集
　　1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
瀧瀬芳之・山本　靖　1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
堤　　隆　1988 『十二遺跡』御代田町教育委員会
　　1989 『根岸遺跡』御代田町教育委員会
東京都埋蔵文化財センター　1995 『三吉野遺跡群』現地説明会資料
土井　孝　1983 「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集
中川成夫他　1958 「埼玉県大里郡花園村の考古学的調査」『史苑』第18巻第２号　立教大学史学会
野島　稔　1984 「河内の馬飼」『万葉集の考古学』筑摩書房
文化庁編　1995 『発掘された日本列島 '95新発見考古速報』朝日新聞社
増田逸朗・中島　宏他　1981 『清水谷・安光寺・北坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第１集
松井　章　1987 「養老厩牧令の考古学的考察」『信濃』第39巻第４号　信濃史学会
松崎元樹　1995 「三吉野遺跡群」『たまのよこやま』東京都埋蔵文化財センター報№33
宮田浩之　1990 『三沢古墳群Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第62集
　　1993 「北部九州の馬具と馬飼」『古墳時代における朝鮮系文物の伝播』第34回埋蔵文化財研究集会
宮瀧由紀子　1993 『水判土堀の内・林光寺・根切』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第132集
桃崎祐輔　1993 「古墳に伴う牛馬供儀の検討」『古文化探叢』第31集　九州古文化研究会
　　1994 「Ｋ－４号古墳周溝出土の馬歯・轡とその意義」『塚田遺跡』御代田町教育委員会
山川守男　1992 「古墳時代馬小考」『研究紀要』第９号　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
　　1995 『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
山口英男　1992 「農耕生活と馬の飼育」『新版古代の日本』８関東　角川書店
　　1994 「文献から見た古代牧馬の飼育形態」『山梨県史研究』第２号　山梨県

研究紀要 第12号

1996

平成8年3月25日印刷

平成8年3月31日発行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社